



伝統医学で使われる薬を売るヤンゴン郊外の薬局



国際協力の担い手たち

NPO法人命門会

健康を届ける日本の鍼灸師

はり・きゅう・指圧などで病気を治療する東洋医学。
ミャンマーにその技術を普及すべく、
NPO法人命門会は10年以上にわたり活動をしている。



講習会では2人1組でつぼの位置を確認する



伝統医学では薬草を蒸して患部に当てて治療する



頭部へのはりの打ち方の手本を見せる深澤さん(中央上)

一つの縁がつないだ 伝統医学と東洋医学

ミャンマーで今、ある日本の技術が広まりつつある。人間の体にある361の経穴(つぼ)。そこにはりを打ったり、指圧をしたりして病気を治す東洋医学だ。

「そもそもは中国発祥ですが、つぼを細いはりで正確に打つ技術など、日本は独自の治療法を生み出してきました。痛くないのによく効くのが特徴です。そう話すのは、NPO法人命門会の代表、片倉武雄鍼灸師。この技術をミャンマーに持ち込んだ仕掛け人だ。

命門会が設立されたのは1983年。当初は鍼灸指圧を日本国内に広めることが目的で、海外での活動は考えてもいなかった。しかし、そんな片倉さんの運命を変えたのが、ミャンマー出身のキンミョウラさんとの出会いだった。ミャンマーの農村部では、薬草を煎じて飲んだり、布に包んで蒸したものを患部に当てたりといった伝統医学が主流。安くてよく効くと評判で、伝統医学の医師を育成する専門の大学もあるほどだ。「でも実は、骨や関節、筋肉の痛みなどにはあまり効かないようなんです」と片倉さんは話す。

日本の大学院で東洋医学の効果を知ったキンミョウラさん。機材を使わず、医師の「技術」さえあれば治療できる東洋医学なら、ミャンマーの農村でも取り入れられるのではないかと。祖国

の人々の健康を守りたい一心で、友人を通じて知り合った片倉さんにアプローチしてきたのだ。

伝統医学の医師たちに、鍼灸指圧を伝えてほしい。「キンミョウラさんの熱意に胸を打たれ、これも何かの縁だと思い引き受けました」と片倉さんは振り返る。

そして2001年、命門会の挑戦が始まった。まずは年に数回、伝統医学を教える大学や病院などで講習会を開くことに。片倉さんと副代表の深澤智子鍼灸師を中心に指導を続けてきた。そして2010年には、

ミャンマー語を操る水口知香鍼灸師が加わった。大学でミャンマー語を学び、NGO職員としてミャンマーの農村で8年間活動。「植林などの支援をしていたのですが、多くの人が適切な医療サービスを受けられずに困っているのを見て、もどかしさを感じていました」。現地でも知り合った片倉さんと深澤さんに感銘を受け、鍼灸師になるために勉強。命門会のメンバーとなり、鍼灸師、通訳として活躍している。

全国に広がる 講習の成果

「今日は指圧を2人1組で練習しましょう」
「まずはお手本をしっかり見てください」
講習では毎回20人を受け入れ、つぼの位置や種類、はりの打ち方、指圧のコツ、その効果などをみっちり指導



講習参加者に修了証を渡す片倉さん(中央)

する。参加しているのは、全国から集まった伝統医学の医師。彼らが技術を身に付けることで地方にも技術が伝わり、新たな医師が育っていくという仕組みだ。
「みんなやる気があつて吸収が早い。1週間教えればすぐに実践できるレベルになります」と片倉さん。中には「薬草とはりをうまく組み合わせた治療ができないか」と伝統医学への応用を提案する人も。「薬草を使って患部の痛みを和らげ、症状が重い部分だけにはりを打ってみては？」と深澤さんはアドバイス。「治療の幅が広がり、実践に役立つ技術が学べる」と評判だ。
これまでの参加者は300人以上。「この前、ヤンゴンの指圧マッサージ屋に立ち寄ると、たまたま教え子の店だったんです。私が教えた通りに、彼女の弟子が指圧をしてくれました。きちんと日本の技術が伝わっていることが実感できてうれしかったですね」と深澤さんはほほ笑む。水口さんも「技術を持った人が育てば、多くの人が治療を受けられる。そのお手伝いをできていることがうれしい」と話す。
現在はJICA草の根技術協力事業を通じて、鍼灸指圧の技術や理論をまとめたテキスト作りが進行中。いわばこれまでの活動の集大成だ。「大学や病院で人材育成に役立ててもらいたい」と片倉さん。ミャンマーの人々に健康を届けるべく、日本発の東洋医学は確実に定着しつつある。